

校長室だより 2025年度2月号その2



Be Creative

合格おめでとう！

どんな場面でも命を守ることが
できる看護師を目指して

名古屋市立大学医学部

保健医療学科看護学専攻合格

3年G組 相武陽光君(剣道部)



私は将来、救急医療に携わる看護師として社会に貢献したいという思いから名古屋市立大学を志望し、この度、その実現に近づく第一歩を踏み出せたことを大変うれしく思っています。

本学を志望した理由の一つは、令和8年度開棟予定の救急医療センターの設立です。この施設は、高齢化の進展に伴う名古屋市内の救急搬送の増加、南海トラフ地震など災害発生時の災害医療活動の推進、救急科専門医不足に対する人材育成に対応するため、更なる機能拡充を図ることを目的としています。このような実践的な環境で、専門性を高められる点は、私の将来像を実現するために不可欠だと感じました。そして、私生活においても、「いざ」と言う時に即座に対応できる力を身につけ、「どんな場面でも命を守ることができる看護師」へと成長していきたいと考えています。その目標を実現するために、受験に向けては共通テスト対策に力を注ぎました。配点比率が高いという本学の特徴を踏まえ、基礎の徹底と演習の積み重ねを意識し、日々、努力を継続してきました。「救急医療に携わりたい」という強い思いが、最後まで私を支えてくれました。

相武君の文章を読み、母の看護をしていた時のことを思い出した。がんの治療にこれ以上は耐えられない、治療をやめようと思った時のことだ。治療を始めたがばかりに、母は坂道を転がるがごとく弱まり、歩けない状態となった。こんな治療さえしなければ、命は短かったとしても、普通の暮らしができたかもしれなかったと後悔した。その思いを看護師さんに伝えた時、看護師さんは否定することなく、柔らかく私の思いを受け止めてくれた。その人にはすべての思いを吐き出すことができた。緩和ケアハウスへの移転の相談にものってもらった。「お母さんの終の棲家を探すのに妥協はいらない。心行くまで探せばいい。私たちはそのフォローを必ずするから。」彼女の支えにより、私は次に向かう気持ちを立て直すことができた。ほどなくして、母が緩和ケアハウスに移ることになった時、その人は静かに出口のところで私を待っていてくれた。「山口さん、あなたが最初に言ったこと、治療のことだけど。治療を行わずに、もし、思いのほかお母さまが早くに逝ってしまわれたら、きっと後悔したと思いますよ。あなたの選択は正しかった。私は、心からそう思っていますよ。」彼女は最後の最後のところで、もう一度、私を救ってくれたのである。看護師が救うのは患者だけではない。家族をも救うのである。